

竹内栖鳳晩年の水墨風景画——水墨山水の刷新と潑墨による心象表現——

藤木晶子（京都市立芸術大学）

竹内栖鳳は、近代京都画壇において従来の円山四条派の伝統を一新した写生画家として知られるが、晩年にあたる大正末期から昭和初期にかけて多数の水墨風景画を手掛けた。それらには絵筆に抛らない滲みを多用した墨面が認められ、水墨画の一技法「潑墨」の活用として解釈されてきた。ただ、これら晩年の水墨風景画の作品群の包括的な調査研究は試みられてこなかった。

発表者は、これらの水墨風景画を可能な限り実見調査した。その結果、《晩鴉》をはじめとする昭和8年頃の作品がひとつの画期をなすことが明白となった。それらは画面中央に濃い墨調を示し、樹木等を示唆する表現手段として偶発的な滲みの墨跡を積極的に用いている。そこには、栖鳳画風の特徴とされてきた写実表現とは著しい懸隔が見られる。これらの作品の主な発表機会となった淡交会では、他の作家が風景画の題材に山岳を選ぶ傍らで、栖鳳は新奇性の高い横構図の平野風景に固執した。彼が執心した画題は、かつて旅した中国揚州を想起させる関東平野の水郷、潮来の風景である。同地取材の写生帖を調査したところ、素描には丹念な対象観察の様子が確認され、滲みや簡潔な墨線による情趣表現を重視した本画とは大きく異なることがわかった。かたや本画において、潮来独特の片欄干の橋や舟、ポプラなど、写生を重ねた題材を多用していることも確認できた。さらに、潮来取材の作品を水墨画に限定せずに広く検討すると、栖鳳は昭和2年の潮来初訪問の後、まず着彩画に専心し、その後水墨画の制作に着手していることが判明した。つまり昭和8年頃に潮来を描いた水墨風景画は、実は時を隔てて同地を回想した心象風景だったのである。ところでまた、栖鳳は心情を表す絵画には紙本が適すると述べている。当時、画壇ではまさに紙本への傾倒と水墨画の再評価が進行していたが、その状況下で栖鳳は自らの表現に適した紙を求め、「栖鳳紙」を特注する。この紙の繊維組成の試験を行ったところ、晩年の水墨風景画の特徴をなす豊潤な墨跡は、栖鳳紙の吸水性と滲み具合によって達成されたものと判断できた。栖鳳は意識的に潮来の地を心象として表現するため、技法のみならず素材までも探求していたのである。

従来の栖鳳研究においては、欧州巡遊後、日本画に西洋の写実表現を導入した功績が注目され、彼の水墨画はそれを具現する《ベニス月》を中心に論じられ、写生画家という作家像と齟齬のある晩年の水墨風景画は等閑に付されてきた。しかし本考察によれば、栖鳳はこの作品群で新たな画境を開拓したと評価できるだろう。中国山水画に起源をもつ潑墨の画法を用い、自国の水郷の平野風景を中国の光景に重ねて描いたその水墨風景画は、伝統的な水墨山水の画題や構図の刷新と位置付けられる。晩年の栖鳳は西洋的な写実主義を基点にした東洋回帰の姿勢のなかで、偶発的な墨の滲みに依拠する心象風景という表現に達したのである。